
ミナソコ

はやと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミナソコ

【Nコード】

N9859W

【作者名】

はやと

【あらすじ】

14歳の夏、父親との間にできた秘密。
水の底へと沈めた罪。

教育学部に通う大学生の一条和也^{いちじょう かつや}は、ある日、教諭の紹介で家庭教師のアルバイトをすることになる。

教える生徒は、おとなしそうな女子中学生、水瀬彩。みなせ あや

彼女の姿に重なる、暗い過去の面影。

和也の記憶にある真実と、彩の心に巢食つ闇。

過去が息を吹き返す…

【ミナソコ】1（前書き）

キャラ紹介？

いちじょう かすや
一条和也

19歳、大学生。

真面目で思いやりがあり、周囲からは好かれている。
大勢で騒ぐタイプではないが、人付き合いは良好。

背は平均よりやや高めで、細身。
肌も髪も色素が薄い。軽めの天パ。

両親がすでに他界しているため、母方の祖父母の家に同居している。

父方の親族については色々複雑で、和也は会ったこともない。

【ミナソコ】 1

今も、ときどき夢に見ることがある。

湿っぽい浴室。 ぬんだ空気。 壊れかけた換気扇の音。
無表情で、しかし額に汗をにじませる父親の横顔。
青白い足首。

排水口へと向かう、 錆色の水の流れ。

どこまでが現実で、どこからが妄想なのか…
境界はひどく曖昧だ。

目覚まし時計が、 今日も真面目に自らの任務を遂行すべく声を上げる。

布団の上で悪夢に喘いでいた彼にとっては、 意識を呼び戻してくれ
たそれは天使の声か。

いや、それは大げさだ。

仰向けの体勢は変えないまま、 腕だけを伸ばして目覚ましを止める。

気分は、決してよくない。

気だるさに、しばらく体を起こすこともできず天井を見つめる。

「…やな感じた…」

つぶやき、一度だけ深呼吸すると、彼は物憂げな表情のままのらくらと立ち上がった。

重い手足に やつと服を通し着替えをすませると、几帳面に布団をたたみ、湿気ですべりの悪くなったふすまを開けて部屋を出る。

先ほどまでの暗い表情は、部屋に捨てていく。

「おはよう、じいちゃん」

「ああ、おはよう和也」

先に洗面台を使っていた祖父と、朝の挨拶を交わす。

いつも通りの笑顔で。

顔を洗うと、祖父と一緒に台所へ。

祖母の小さな後ろ姿に、二人そろって呼びかける。
おはよう、と。

祖母もまた、穏やかに同じ言葉を繰り返す。

日々変わらない平和。

あたたかい家庭の象徴のような味噌汁の匂い。

昭和の雰囲気の色濃い、純日本家屋での暮らし。

これが、今の一条和也の現実だった。

和也は、16の頃からここで 母方の祖父母の家で生活している。

両親は、すでにない。

母親は和也が まだ幼い頃に病で他界し、その後は父親と二人で生活していたのだが、その父も亡くし、疎遠だった親類を頼ることに なったのだ。

長いブランクのせいもあり、はじめこそ互いに気をつかって ギクシャクしていたものの、人間味あふれる祖父母の姿勢に和也も次第に心をひらき、馴染むまでに それほど時間はかからなかった。

高校を卒業したらすぐに働き始めるつもりでいたのだが、祖父母のおかげで大学へ進学することもできた。

本当に、感謝するばかりだ。

二人の厚意に報いるためにも、自分の夢をつかむためにも、勉学に励む毎日だ。

そう、目的が はっきりしている今は、和也にとって充実した日々と言えた。

何不自由なく、確かに幸せだった。

過去の影が、彼の生活を侵食し始めるまでは。

電車に揺られ、大学へ向かう。

暦のうえではとくに秋だというのに、まだ残暑はきびしい。

窓から差し込む陽射しは強く、和也はシャツの袖をめくる。

男性としては かなり色白の肌。

本人は少しコンプレックスに感じていたが、日焼けしない体質なので仕方ない。

髪も色素が薄く、若干クセがある。

これは父方の遺伝だ。

父はそうでもなかったが、その母親　つまり和也の知らないもうひとりの祖母が、ひどいクセ毛だったらしい。

幼い頃は完全なクルクル天然パーマで、たびたび“外国人の子供”と間違われるほどだった。

あの頃は父親の地元の田舎に住んでいたから、和也の見た目はよいにめずらしがられたのか、好奇の視線をあびることも多々あった。今はわりと都会的な　この街に越してきたこともあり、そういう経験もすっかりなくなったが。

それなりの場所へ行けば奇抜な髪型やファッションの若者をよく見かけるし、大学にだって個性的な生徒は大勢いる。

自由　この場所の閉塞感のないところを、和也は気に入っていた。

はじめこそ人の多さに戸惑ったものの、今は　それが安心感にもつながっているのだ。

英会話のCDを聞き流しながら車窓にうつる景色を眺めているうちに、下車する駅に着く。

イヤホンはずし肩にかけたカバンに押し込むと、人の流れに混ざって外に出る。

すっかり慣れた、広い構内。もう迷うこともなく、すんなりと改札口へ行けるようになった。

数分とおかず、次々とやってくる電車。

にも関わらず、この人たちはやけに急いでいる。

和也は、そのわずか数分さえ惜しんで走っている人々には未だ共感できずにいた。

田舎の駅では、次の電車がくるまで30分や1時間待つのが当たり前だったから、彼にとっては数分など待ち時間に入らない。

のんびりした気質は彼の良いところであり、都会では時に短所でもあるようだった。

階段をくだり出口へ向かう。

会社員、学生、旅行者……様々な人が行き交い、音が氾濫する。

その人込みの中、こちらに向かってくる一人の少女。

紺色の生地には白いスカーフといった、清楚なセーラー服。

スカーフと同じくらい白く透き通った肌と、日本人形を思わせる艶やかな黒髪。

古風にさえ感じられる彼女の姿に、和也の視線は引き寄せられた。

すれ違い様、絹糸のような長い髪が、ふわりと秋風になびく。

和也は、はっとして振り返る。

一目惚れとか、そんな甘ったるい感情ではない。

焦燥と畏怖　　今朝方の悪夢と重なり、鼓動が速まる。

しかし、少女は　あっという間に視界から姿を消してしまった。

まるで彼女自体が、幻か亡霊であるかのように。

【ミナソコ】2（前書き）

キャラ紹介？

みき そうし
三樹総司

20歳、大学生。和也の友人。

金にちかい茶髪、両耳にピアス。服装も派手。

人懐っこい お調子者で、ムードメーカー的存在。

本人はモテているつもりらしいが、フラれることが多い。

気ままな実家暮らし。

どうでもいい情報だが、母は かなりの新撰組マニア。

【ミナソコ】2

ノートにペンを走らせる音、生徒たちの囁き、教壇に立つ講師の声。すべてがどこか遠く、おぼろ気に響いている。

朝の少女のことが脳裏にちらついて、和也は授業に集中できずにいた。

わずかな息苦しさ、苛立ちにも似た感覚。これは何なのだろう…。

やがて何ひとつ頭に入らなかった授業は終わり、正午になる。

大学内の食堂。

席に着き、日替わり定食をつつきながら、やはりボーッとしていると、不意打ちのごとくバシッと背中、に衝撃が走る。

「痛っ……」

「よお、元気な一条！」

振り返ると、鮮やかな色彩が目飛び込んできた。

三樹^{ミキソウ}総司、大学で知り合った友人の一人で、底抜けに明るいお調

子者。

金にちかい茶髪にピアス、派手で奇抜なファッションを好む青年だ。彼は持っていたカツ丼をテーブルの上におくと、和也の隣に腰かけた。

とたんに、場が賑やかになる。

「なんだあ、寝不足か？」

「あー…寝不足っていうか…」

「どうせ深夜までエロサイトでも見てたんだろ。欲求不満め」

「そんなん見てないよ。欲求不満でなんだよ…」

わずかに溜め息をもらしながら、覇気のない反論をしていると、

「深夜までくだらんサイトばかり見てるのは自分だろ、三樹」

抑揚の少ない、やけに落ち着いた声。

声の主は、参考書片手に和也の向かいの席に座った。

「あ…武居」

「お前、飯は？」

「昼は食わん」

眼鏡の位置をなおしながら答えた武居恵は、同じく和也の友人だ。
スラットとしていて、どこか憂いがあり、書生さんスタイルが似合い
そうな和風好青年である。

三樹と武居は、中学時代からの長い付き合いらしい。

「なんだよ、お前。まさかダイエットですかあ？」

「違う。単に金欠だ」

きつぱりと言い放つ武居。

「今月は参考書とか色々を買ったからな。家賃のこともあるし、バ
イト代が入るまでは食事を抜くしかない」

なんだかすごく悲しいことを言っているのに、彼が口にする苦行
に励む高僧のようだ。

ちなみに、彼の実家は寺である。

「一条、悩み事を相談するなら人を選べよ。三樹じゃ何の役にも立たないぞ」

「ああ、わかってるよ」

「お前ら、ひでえぞ！」

…などと言いながらも、自然と笑いがこぼれる。

いつの間にか、和也の心の靄は消えていた。

「そんなに大変なら、親に仕送りとか頼めばいいじゃんよ」

「俺は実家を継がない代わりに、好き勝手やらせてもらってるからな。」

自分のことは自分でなんとかすると、約束して出てきたんだ」

「ほんと堅物だよな、お前。一条も そう思うだろ？」

「いや、俺は武居のこと尊敬するよ。」

俺も、ほんと自立できればいいんだけど、じいちゃんたちに頼ってるし」

「なんだよ、二人そろって真面目すぎるぞ。人生もつと楽しみよ！青春は短いんだぞ！！」

身を乗り出しながら力説する三樹。
しかしまあ、人生の楽しみ方も様々なようで。

「俺は充実した毎日を送っているぞ」

「俺も、それなりに。
別に不満もないけど」

「むしろ一番心配なのは三樹じゃないか。単位がとれるか危ういの
は、お前だけだぞ」

「うっ……」

そこを突っ込まれるとつらいようで、さすがの三樹も言葉に詰まる。

「だ、大丈夫さ…なんとかなるさ」

歯切れ悪く独り言のようにつぶやくと、ひきつった笑みを隠しながらカツ丼をがつがつと食べ始めた。

そんな友人の姿に、あきれて肩をすくめる武居。

和也は まるで正反対な彼らを眺め、クスリと笑う。

容赦ない一言も、親友だからこそ言えるのだ。

「おー、いたいた」

そんな三人に近づく人影。

いつせいに向けた視線の先。

でかい三角定規を手にした白衣の男が、こちらに向かって歩いてくる。

声をかけてきたのは、数学科講師の加賀美^{カガミ}だった。

歳は40過ぎ。

大柄で、ボサボサ頭に無精髭。熊、と例えるのがしっくりくるような男だ。

やる気があるのかないのか、いつも眠そうで、着ている白衣もよれよれだ。

そして、邪魔なのになぜかいつも持ち歩いている、でかい三角定規。

変わり者としても有名な彼。

生徒からの人気は、好きか嫌いかがはっきりと二分される。

和也たちは前者。

飄々として、どこかとぼけたところも愛嬌ととらえていたし、何より、話しやすかった。

加賀美のほうも、一見バラバラな個性の三人組を気に入って、よくちよっかいを出していた。

「お前ら、ちよつくらバイト頼まれんか？」

挨拶もそこそこに、加賀美は唐突に話を切り出した。

ちらりと視線を交える和也たち。

「なんすか、バイトって？」

大して興味もなさそうに尋ねる三樹。

「家庭教師だ」

加賀美は定規を持ち直しながら、説明を始めた。

「知人の子なんだが、ちよつと人見知りでな。

人が大勢いる塾は嫌がるし、一度つけてみた家庭教師も合わなかったらしくて。若い学生のほうが気も合うかもって話でなあ。

お前ら、将来は教師 目指してんだろ？

予行でやってみんのもいいだろう」

「男っすか」

「女の子だ」

「あつ、じゃあ俺にやらせて下さい！」

担当するのが女の子だと聞いて、俄然やる気を出し手を挙げる三樹だったが、

「……………」

長めの沈黙と、疑するような薄目。

「おい。武居、一条。お前ら どっちか引き受けてみんか？」

加賀美は、完全に三樹をスルーした。

「先生ひでえよ。俺やる気満々なのに！」

「いや…なんか、お前はいいわ。違つところで やる気出されても困るからな」

「先生、俺の純粋な目を見てください！」

なおもアピールする三樹だったが、加賀美は ひらひらと手を振って聞き流す。

すでに、的は和也か武居にしばらくいた。

「やるとしたら週一で、たぶん、土曜か日曜か…」

「俺は無理です」

きつぱりと断ったのは、武居。

「バイト、土日が主なので」

「そうかぁ…」

少しばかり残念そうな声をもらして、加賀美は視線を和也につつす。

「あ…俺、日曜ならわりと時間ありますけど…」

人の良い和也は、つい、正直に告げてしまう。

「そうか、やってくれるか！」

「いや、まだやるとは…」

「一条なら安心だなあ」

「ちよっ…先生、俺まだやるとは…」

「俺じゃ安心じゃないんすか!？」

戸惑う和也のつぶやきは、納得できずに叫んだ三樹の声にかき消された。

「しつこいぞ、三樹。」

それじゃ一条、頼んだからな。今度の日曜、俺と挨拶に行くぞ」

「加賀美先生っ!」

名前を呼ぶも、白衣の背中は一瞬の間、あっという間に食堂から立ち去ってしまった。

「まあ、頑張れ」

呆然とする和也の耳に届いた武居の言葉は、エールとしてはあまりにも冷静で、まるで他人事だった。

【ミナソコ】3（前書き）

キャラ紹介？

たけい めぐみ
武居恵

19歳、大学生。
和也の友人。

三樹と違い落ち着いている。学級委員タイプのしっかり者。

細い黒縁の眼鏡をかけていて、書生さんスタイルが似合いそうな和風好青年。

現在は独り暮らし。
実家は寺。

【ミナソコ】 3

まったく、今日は精神的にひどく疲れる1日だった。

寝覚めの悪さに始まり、今となっては白昼夢としか思えない謎の少女との出会い。

それから、なかば押し付けられてしまった家庭教師のバイト。

重たい気持ちを引きずりながら、帰宅する和也。

「ただいま」

玄関を開けると、声の調子を意識的に上げる。
しかし、祖母は細やかな変化さえ見逃さなかった。

「おかえり、和也。……どうかしたの？」

「え？」

「なんだか、いつもより暗い顔」

よけいな心配はかけたくなかったが、ここで変に言い訳するのも気がひけた。

和也は素直に、加賀美に頼まれたバイトのことを祖父母に告げる。
頼まれたものの自分にとまるかどうか…そんな不安な胸の内も、
すると、

「いい機会じゃないか。やってみなさい」

穏やかに、祖父は激励の言葉を口にした。

「お前の夢は先生になることなんだから、これは良い経験になる。
引き受けて、悪いことは何もないと思うよ」

「そう、かな…？」

「そうさ。何事も、まずは挑戦してみなければ」

それもそうか、と思う。

祖父の 人生における大先輩の言葉には、実に説得力があった。

「うん、確かに その通りかもしれない」

もつと前向きに、積極的になろう。

和也は祖父の助言を素直に受け入れ、微笑みを返す。

「ありがとう、じいちゃん。俺、やれるだけやってみるよ」

話して良かったと、和也は思う。

こうして相談にのってくれる家族がいるというのは、本当に幸せなことなのだ。

「すぐ夕飯になるけど、お風呂入るなら沸いてるよ」

ずっと様子を見守っていた祖母は、話が一段落したのを見計らって和也に言った。

「じゃあ、先に入ってくる」

答えると、和也は自室に荷物をおき、着替えを持って風呂場に向かった。

少し、ひんやりとした空気。

熱めのシャワーを浴びると、蒸気が浴室内を満たしていく。

体を流しながら、ふと、加賀美が言っていたことを思い出す。

確か、教えるのは女の子。しかも人見知りだとか。年齢は聞いていない。

まあ、小学生だとしても最近の子はませているし…

（どんな教え方すりゃいいんだろ。会話とか、もつのかな…？）

せめて男子なら、こんなに気をもまなくても済んだろくに。

（いかん、さっき前向きに考えようと決意したばかりじゃないか）

何事も、やってみれば なんとかなる。

マイナスな感情をふり払い、深く湯船につかる。

和也の体積分あふれ出た湯が、勢いよく排水口に吸い込まれていく。

反響する音。

瞬間、フラッシュバックのごとく駆け抜けていく映像たち。

錆色の濁った水、黒髪の少女、汚れた工具。
暗い水面と……父親の死に顔。

「！？」

慌てて立ち上がろうとしたせいで足元が滑り、さらに深く水中へと沈み込む。

危うく、溺れかけた。

「ぶはっ」

浴槽のへりにつかまり、空気を求めて顔を出す。

「何だよ…いつたい……」

誰も知らない“彼ら”の罪。

忘れてしまいたくて、蓋をして心の奥に追いやった記憶。

今の暮らしがあれば、過去なんて消せるのではないかと思っていた。

けれど、実際は違うのだ。

光が強くなればなるほど、影も色濃く伸びるのだから。

そして、むかえた日曜日。
青空の広がる、爽やかな秋晴れの日。

家庭教師の依頼主のもとを訪ねるため、加賀美と駅で待ち合わせる
ことになった和也。
しかし、約束の時間を30分過ぎても加賀美が現れない。

居場所を確認しようとケータイにかけてみたのだが、長いコール音
のあと、留守番電話に切り替わってしまった。

出口付近の壁に寄りかかりながら、和也は落ち着かずにキョロキョ
ロと視線を動かす。

（まさか自分で言い出して忘れてるなんてこと…）

そこまで無責任だとは思っていないが、一抹の不安がよぎる。

それから、もうひとつ。

普段も あの三角定規を持ち歩いていたらどうしよう という、

案外どうでもいい心配をしていた。
三樹がいれば遠慮なく突っ込むだろうが、和也に そんな技量はな
い。

小さな溜め息をもらし、帰りたい衝動にたえていると、

「おー、いたいた」

間延びした のんきな声。

顔を上げると、相変わらず寝起きそのままといった風貌の加賀美が
こちらに歩いてくるのが見えた。

手にしているのがセカンドバッグだけだったので、そこはひとまず
ほっとする。

「何してたんですか、先生。ケータイかけても全然でないし」

仏頂面で和也が問うも、加賀美は少しも悪びれない。

「いやあ、ちつとばかり家出るのが遅れてなあ。

電話かけたのか？ 気づかなかった…」

しゃべりながら、バッグの中をあさる加賀美。

しかし動いていた手はすぐに止まり、あっさりと言い放つ。

「ケータイ家に忘れてきたわ」

「……」

怒るだけ無駄だ　和也は　そう思うと同時に、目の前にいる中年親父の私生活が　すごく心配になった。

それは服装を見ても明らかというか…

加賀美は一応スーツを着用してきたのだが、それは　かなり年季のはいった代物だった。洗濯方法を間違えて縮んだのか、ズボンは裾がやけに短い。

「先生、スーツそれしかないんですか？」

「礼服はあるぞ。大人の常識として」

「…そうですか…」

加賀美の口から常識なんて言葉が飛び出すとは。まるで詐欺だ。

「…もう、いいです。早く行かないと、先方にも迷惑ですよ」

男二人、たいして会話もなく足早に歩いて、住宅街に入る。

「ここだ」

そして加賀美が足を止めた先。

眼前には、見るからに裕福そうな洋式の邸宅が建っていた。

目を見瞠り、唖然としながら　ただ立ち尽くす。

和也には、それが白亜の城にも見えた。

「…加賀美先生の、お知り合いなんですよね？」

「ああ。ここの主人とは、けっこう親しい仲でなあ」

「嘘だ！」

「嘘なんてついてねえよ。人を見た目で判断するなよ、一条」

花と蔦をデザインしたアンティーク調の門。

その横にある呼び鈴を鳴らし、カメラ付きのインターホンに向かっ

て呼びかける加賀美。

声が返ってきて、間もなく、品の良い淑やかな女性が二人を出迎えた。

「お待ちしてましたわ。さあ、中へどうぞ」

「すみませんねえ、遅れてしまつて」

「いいえ、お気になさらないでください」

母親らしい女性は愛想よく微笑み、それから、後ろに控えていた者に親しげに呼びかける。

「ほら、あなたもご挨拶して」

言われて、一步前に進み出た少女。

娘の姿を見たたん、和也は足がすくんで動けなくなった。

烏の濡れ羽色の髪、物憂げな黒目がちの瞳。

白いワンピースにクリーム色のカーディガンをはおっているが、彼

女自身は和風の印象が強く、まるで日本人形のように……

それは間違いなく、先日 駅で見かけた あの少女だった。

息を飲む和也。

白昼夢が、現実となり そこにいた。

【ミナソコ】4（前書き）

キャラ紹介？

かがみ あつし
加賀美惇

42歳、数学科講師。

いつもよれよれの白衣を着て、でかい三角定規を持ち歩いている。
ボサボサ頭に無精髭、眠そうな目。

生徒からの人気は、好きか嫌いかはつきり分かれる。変人として有名らしい。

ちなみに独身。

【ミナソコ】4

「ミナセアヤ水瀬彩です」

美しいが表情の乏しい少女は、そう言うつと わずかに頭をさげた。

硬直して言葉を発せずにいた和也を、加賀美が肘で小突く。

「ほれ、お前も挨拶しとけ」

「え……あ、はい。」

えつと……家庭教師をやらせてもらつことになりました、一条です」

少女 彩を見ることができず、母親のほつに目を向けながら、必死に動揺を隠す。

「今日は、ご主人は？」

「それが、どうしてもはずせない用事ができてしまって」

「相変わらず、忙しいですねえ」

「ええ。加賀美さんによく伝えてくれと。」

立ち話もなんですね。こちらへどうぞ」

水瀬親子の後につづき、客間におされる和也と加賀美。

高級そうな装飾品と応接セット。

すすめられるまま、革張りのソファに腰かける。

和也の向かいの席には、彩が。
気まずいこと この上ない。

潇洒だが、すべてが きちっとしすぎていて、まるでショーウィンドーのような家。
微動だにしない整った顔立ちの少女は、装飾の一部のマネキンにも見えた。

（まるで、すべてが作り物みたいだ）

つぎはぎだらけの襖や、雨水のシミが模様をつくる天井…そんな“生活感”のある場所のほうが、ずっと落ち着けると和也は思う。

母親と加賀美が話をしている間中、彩は じっと和也をにらんでい

た。

これも警戒心の表れなのか…品定めされているようで、和也は胃が痛くなる思いだった。

「こいつ、将来は教師になる予定なんですよ」

ふいに、加賀美が和也の肩に手をおいた。
はっとして、顔を上げる。

「真面目なやつですから、家庭教師も適任かと。
なあ、一条？」

「えっ…はい、頑張ります」

「なんだよ、緊張してるのか？」

絡み付く彩の目線が気になって、頭がうまく働かない。

「優しそうな方で良かったですわ。ねえ、彩？」

「……」

無言。

少女は、何も言葉を返さない。

ただ、とりつかれたかのように一点を、和也だけを　その瞳に映していた。

「ちょっと彩……」

すみません、愛想のない娘で」

母親は苦笑を浮かべ、それから和也に向き直る。

「よろしくお願いしますね、一条先生」

「は、はいっ。こちらこそ」

平静を装い、できる限り明るく振る舞ったが、和也の心中は穏やかでない。

逃げ出したい、というのが正直なところだ。

しかし、和也の意に反して話は進められていく。

「それじゃあ、来週あたりから早速はじめますかね」

「ええ、そうしていただけると助かりますわ。

時間は……」

不安　そればかりが膨らんで、和也の視界も思考も、すっかり鈍くなっていた。

ただ条件反射のように返事をして、気がつけば、いつの間にか話はまとまっていたのだった。

重い足どりの和也と、樂觀的な加賀美。
対称的な二人が並んで歩く帰り道。

「なかなか可愛い娘さんだろ？」

「ええまあ…でも、すごく睨まれてたような…」

「人見知りなんだって。向こうも緊張してたんだろう」

和也の気も知らず、のんきに笑う加賀美。

やっぱり、別の学生に頼んでいただけませんか

そう告げようとしたのだが、

「あとは任せたぞ、一条」

表情から読みとれるのは、期待と信頼。

加賀美の強い一言におされ、

「……はい」

和也は笑顔をつくり、頷くしかなかった。

無理に飲み込んだ“本心”が、ひどい消化不良を起こすのは必至。

その夜、和也は再び悪夢にうなされ飛び起きた。

思い浮かぶ彩の顔。同時に、過去の擦りきれた映像も。

やはり似ている “あの少女”に。

「水瀬……ミナセ……？」

なぜか、その名前が妙にひっかった。

「まさか、な……」

そうだ、きっと偶然だ。

けれど、確かなことも存在している。

この頃、繰り返し見るようになった悪夢。

いや

それは夢などではない。現実起きた、忌まわしい出来事。

すべては5年前、和也がまだ14歳だった夏の日に始まる。

（あの時、父さんは……）

父は、薄暗い家で和也の帰りを待っていた。

“秘密”と“罪”を、湿った浴室に隠して。

【ミナソコ】5（前書き）

キャラ紹介？

いちじょう あきら
一条晶

和也の父親。

故 36歳。

複雑な家庭環境に育つ。

16の頃から、建設工事現場などで働く。

仕事は真面目にこなすが、人付き合いが苦手で口数も少ない。

妻の死後、さらに他人との関わりを避けるようになる。

息子の和也とも向き合つことができず、親子関係は希薄だった。

【ミナソコ】5

5年前

当時、和也は父親と二人、山の麓の一軒家で暮らしていた。

一軒家といっても、平屋の陋屋るいおくである。

集落はあるのだが、和也たちの家はひとつだけそこから外れて建っていた。

自然だけは豊かなところだった。

どこまでも広がる森林と田畑。

学校へ行くにも、田舎道を自転車で駆けおりて30分。帰りは延々とつづく上り坂で倍以上もかかるという、本当に辺鄙な場所。

しかし夏になると、その様子が違ってくる。

少し離れた所に温泉郷があるのと、避暑には適していることから、都会の人間が別荘にやってくるのだ。

もちろん、大してかわり合いになることもなかったのだが…

夏の短期間だけ現れる客人たちは、和也にとっては別世界の人間だ

った。

それは、8月も後半にさしかかった、暑い日の出来事。

田舎の夏休みは短く、じきに新学期。

14歳の和也は、残り少ない休日のをんびりと過ごしていた。

その頃、和也の楽しみは、安い使い捨てカメラ片手に森林の中を散策することだった。

気に入った風景や、自然の“表情”を写す。

ファインダーごしに見る世界は彼の心を弾ませ、時に癒しもあたえてくれた。

はつきり言って、あまり家にはいたくなかったのだ。

母が亡くなった後、父は以前より明らかに酒の量が増え、陰鬱になった。

仕事はしていたが、家にいるときは大抵酔っていた。

手をあげるようなことはなかった。そして、言葉をかけることも。

干渉しないというより、すべてにおいて希薄だった。

親子らしい会話など、した記憶がないのである。

もともと息子との距離がつかめずにいた父親は、その間を繋いでいた妻を失ったことで、完全に関わり方がわからなくなったのだろう。

和也自身、思春期の心の揺れも重なり、そんな父親にどう接したらいいのか迷っていた。

互いに、情緒不安定だったのかもしれない。

向き合うことも、思い切って離れることもできない……
ただ同じ家にいるだけの、他人のようだった。

“共同生活”とさえ言えるものではなかっただろう。

夕暮れ

和也が帰宅すると、すでに、父親のワゴンがいつもの場所に停まっていた。

しかしながら、家の明かりは消えたまま。

確かに人の気配はあるのに、やけに静かな屋内。

不気味さを感じながらも、靴を脱いで廊下にあがる。
音を立てないよう細心の注意をはらうも、ボロ家の床は悲鳴を發した。

自分の足音にさえ動揺しながら、ゆつくりと奥へ進む。
よく知っているはずの家が、異空間のように歪んで見えた。

唯一、風呂場に薄明かりがついているのに気づく。

(……?)

目をこらし、遠くから確認していると、

「おかえり」

突然 背後からした声に、心臓が跳ねあがる。

立っていたのは、父だった。

めずらしく酔っていないようだったが、その顔は蒼白で、表情もない。
い。

「父……」

父親は和也の腕をつかむと、強引に風呂場へ引きずっていった。

タイルの剥がれかけた、カビ臭い浴室。

小さな浴槽　その蓋が静かに開けられる。

恐怖心を抱きながらも、興味をそそられたのも　また事実。

引き寄せられるように、近づく和也。

水をはった浴槽の中、黒い絹糸が、水面にユラユラと漂っているのが見えた。

「お前を頼りにしてるよ」

今まで口にしたこともない言葉を、台本を棒読みするように呟く父。

やっとなつくりとした表情は、ただ口元をひきつらせただけ。

交わした視線、共有してしまった秘密。

「お前は、俺を助けてくれるよな…？」

そして、闇に沈む。
。

【ミナソコ】6（前書き）

キャラ紹介？

みなせ あや
水瀬彩

13歳、中学生。

小柄。色白の肌と黒い長髪で、日本人形のよう。

人見知りで友人もなく、本ばかり読んでいるような子。

両親と3人暮らし。

【ミナソコ】6

日増しに色濃くなっていく過去の影。
引きずる憂鬱。

しかし、現実を放棄するわけにもいかないのだ。
受けた仕事は、責任をもってこなさなければ。

家庭教師、初日…

玄関先で　すでに畏縮しながらも、呼吸を整え呼び鈴を鳴らす。
前回と同じように母親が応対して、今日は娘の部屋へと案内された。

「彩、一条先生がきてくれたわよ」

呼びかけると、ゆっくりドアが開いた。

小柄な少女は、相変わらず物憂げな瞳で和也を見上げる。

「…どつぞ…」

けれど、先日 自己紹介したときより物腰が柔らかくなったような気がする。

やはり、あの時は緊張していただけなのか。

「こんにちは」

「こんにちは…」

警戒心を抱かせないように、和也は声のトーンに気をつかう。
堅すぎず、かといって、あまり子供扱いする調子にもならないように…

とにかく、最初が肝心だ。

少しでも距離を縮めたくて、こちらも色々と苦心しているのだった。

「それじゃあ、よろしくお願いします。
後で お茶をお持ちしますね」

「はいっ…ありがとうございます」

母親がいなくなり、室内には和也と彩の二人きり。

勉強机とベッドのほかは、本棚で埋め尽くされた部屋だった。

並んでいる本も、文学的な小説や専門書、哲学に歴史…
女の子らしい可愛さは、はっきりいつて無いに等しい。
子供部屋ではなく、まるで書斎だ。

「ええと……」

一応、“最近の子”が興味を持ちそうな話題を探してきた和也だったが、どうもそれは徒労に終わりそうだ。

この部屋を見る限り、彩の趣味は、若者の流行とは真逆の方向にあるらしい。

「すごい本だね…全部読んだの？」

「はい、一通りは」

「哲学の本もけっこうあるけど、好きなの？」

「カントの人間学には興味がひかれました。ウィトゲンシュタインは、まだ私には難しくて…もう一度、読み返しているところです」

「へえ…そうなんだ…」

難しいどころじゃないだろう、と思う。

（俺より頭いいよ……絶対……）

妙な喪失感を覚えながらも、話を本題に切り替える和也。

「とりあえず、今日はこれからの予定を立てたいから、今 学校でやってる範囲とか教えてもらえるかな？」

苦手なことか、とくに頑張りたい分野があれば、それも」

「わかりました」

個性的、と言えはいいのだろうか。

13歳にして、独自の世界観を確立しているような娘だ。

けれど、会話が成り立たないわけではない。

確かに寡黙ではあるが、こちらが話せば、それなりに言葉は返ってくる。

あまった時間で宿題をみてやったのだが、授業態度は いたって真面目。

教えやすい生徒だった。

こうして、初日は無事に終わる。

帰り際、玄関まで出てきた彩に『ありがとうございます、先生』
と言われ、少し感動してしまったほどだ。

これなら うまくやれるかも…
そう、樂觀視したのだが。

それは、愚直で甘い考えだった。

その月の、最後の日曜日。

和也も、家庭教師の仕事にやっと慣れてきた矢先のこと。

「私、数学って嫌いだわ」

溜め息とともに、本音をもらす彩。

文学少女は、理系は苦手らしかった。

完璧そうに見える彼女の、意外な弱点。

けれど、和也はどこかほっとしている。

彩の人間らしい一面を、見られた気がするからだ。

「こんな公式、普段の生活で何の役に立つの？」

「まあ、その気持ちもわかるけどね…」

「大体、答えが一つしかないっていうのが気に入らないわ。世の中、いろんな考え方や可能性があるのに。なんだか押し付けがましいのよ」

「それじゃあ数学全否定だよ」

苦笑しながらも、以前のような胸のつかえはない。

人見知りだというから心配していたが、一度心を許した相手なら問題はないうだ。

慣れてしまえば、思いのほか よくしゃべる。

（変わり者かもしれないけど、普通の女の子だ）

確実に、二人の間の壁は取り払われてきている 和也はそう感じ
ていたのだが……

「あと一問、これだけ終わらせよう」

そう言って顔を上げたとき、彩と視線がぶつかった。

瞬間、呼吸が止まる。じわじわと再発する疼き。

彩の顔から、少女らしさが突然消えた。

気にしないふりをして問題の解き方を説明し始めるが、その言葉も途切れがちになる。

突き刺さる痛みにたえきれず、笑みをひきつらせて和也は尋ねた。

「…どうかした？ 俺の説明、わかりにくい？」

誤魔化し、それは通じない。

彩は変わらず無表情で、しかし瞳だけは鋭い輝きを消すことなく。

「あのね、先生」

ぽつりと、彼女は言う。

ひどく冷えた、子供らしからぬ声色で。

「私、先生に“よく似た人”を知ってるわ」

「！？」

背筋がゾツとした。

恐怖心などという、単純なものではない。
疑念、焦燥、悲哀、罪悪…

「…な…何を言って……」

その時、ふいにドアをノックする音が響いて、母親が顔をのぞかせた。

「そろそろ休憩してください」

紅茶と菓子がのった盆を手に、穏やかに微笑む。

「お勉強、はかどってるかしら？」

「はかどってないわ。数学なんて嫌いよ」

母親にそう返す少女は、確かに“子供”だった。
先ほどの表情、声色、すべてが嘘のように。

もしくは、こちらの“子供らしさ”のほうか嘘なのか…？

「彩ったら、先生がせっかく教えてくださってるのに。
すみません、わがままな子で」

「…いえ…いいんですよ」

慌てて愛想笑いをつくり、何事もなかったふうを装う。

「ちょっと休憩して、それからまた頑張ろう」

「はい」

「……」

少女の顔と、女の顔…時折まるで別人のようにも見える彩が、人形のように冷たい表情になる彼女が、和也は不気味で仕方ない。

わからない、この子が何を考えているのか。
いや、それ以前に…

この子は、誰なんだ…？

【ミナソコ】7

「一条、金曜の夜とか暇あ？」

大学 午後の授業を終えて帰ろうとしていた和也を、三樹が呼び止める。

「え、なんで？」

「合コンやんだけど、参加してみねえ」

突然の誘いに、戸惑う和也。

見ず知らずの人々と騒ぐ気にはなれなかったし、何より、女子に免疫がない。

しばらく考えるふりをして、左右に首を振る。

「…俺はパス」

「たまにはいいじゃん。楽しいぞ」

「そういうの、俺 苦手だし。武居でも誘っ……たところで、行くわけないか」

和也以上に ばか騒ぎが嫌いであろう武居。

合コンなどと話を持ち出せば、しかめっ面になること間違いなし。

想像して苦笑する和也に対し、三樹は早口で言う。

「あいつはダメ！ピンチヒッターでも呼びません！」

めずらしく、真顔になる三樹。

「女の子たちの前で説法とか始められたらたまんねえもん。雰囲気ぶち壊しだよ」

「あー、しそうだなあ」

実家が寺だけに、煩惱の断ち切り方などの話を始めても不思議はない。

えらく冷えた声で、「お前たちは、人生それでいいのか」と諭しそ
うだ。

「だろ？ だから一条」

「うーん…やっぱパス。ちょっと、最近疲れてるし…騒ぐ気力ない」

肩をすくめて吐き出すと、三樹はわずかに眉をひそめる。

「うまくいつてねえの?」

「ん?」

「家庭教師」

「…まあまあ、なんだけど……。
あの子、どうも苦手なんだよなあ」

つい、本音を漏らした。

「教えてる女子?　かがみん（加賀美のこと）の話じゃ、人見知りだって。
そんなに絡みづらい感じの子なのか」

「ん…何考えてるかよくわからない」

「可愛い?」

「まあ、美人…で、今それはどうでもよくないか」

「女子の部屋で二人つきり、それだけで俺はうらやましい」

心配してくれているのかと思いきや、三樹の関心は やはり女の子のことばかりらしい。

「…まだ中1だぞ」

「愛に年齢は関係ない」

「……教師目指す者としては、誤解をつむ発言だぞ、それ」

あきれながら呟く和也。

彩の姿が思い浮かぶ。

彼女は自ら他人を誘惑するような子ではないが、彼女の容姿は、人を惑わすには十分だ……

（何 考えてるんだ、俺は）

三樹にあてられて、おかしなほうに意識がそれてしまった。

いや、それは責任転嫁というものか。

ちょっとした罪悪感にとらわれながら、三樹を見る。
彼は、いつもの陽気な笑顔。

「一条に足りないのは、女子とのコミュニケーション能力だ」

「はあ…？」

「女心を理解するためにも、レッツ合コン！」

「行かないよ」

武居なみに、ここは はつきりと断った。

三樹はショックを受けたような顔をしていたが、曖昧にしているはきりが無い。

そして何より、現実には家庭教師のことだけで精一杯だった。

（三樹には悪いけど、浮かれてる場合じゃないんだ…今は）

「今度、武居も誘って飯でも食べに行こう。それなら付き合っよ」

「むう………わかった」

にこやかに三樹と別れたものの、無理矢理はりつけた笑みなどすぐに剥がれ落ち、和也の気持ちは再び下降する。

急速に、低く、深く…

鮮明になっていく悪夢。
秘めていた過去。

しかし、あの少女の顔だけがいつまでもぼやけている。
ただ、彩に面影が重なる…そんな気がしてならないのだ。

考えるほどに吐き気が増していく。

それでも和也の意識は、否応なしに記憶の渦へと突き落とされる。

そして

心臓をしめつけるような苦しさをともないながら、思い出した…その名前。

浴槽の中の少女…

謎の失踪、神隠しなどと報道されていた少女…

彼女の名前は

「……ミナセ……ミナセ リン……！」

【ミナソコ】 8（前書き）

今回、かなり陰惨な内容となっております。

ご了承のうえ、本文へ進んでください。

【ミナソコ】 8

和也は再度、あの日の風景に引きずり込まれる。
5年前の、蒸し暑い夜へ。

浴槽の水に沈む、精巧な人形……

違う、それは確かに人だった。

まだ幼い、小学生くらいだろうか。

花柄のワンピースを着た、黒髪の少女。

それが死体だと気づくのに、時間は必要としなかった。

驚愕して、父親を見る。

彼は相変わらず無表情で、しかし わずかに声を震わせながら和也に言った。

「俺を、助けてくれるよな？」

近くで、雷鳴が聞こえた。

雨のおいが、近づいていた。

夏の暑さは、遺体の腐敗を容赦なく進行させる。

異臭を隠すためにはどうすればいいのか。

焼く…いや、これは目立ちすぎる。

山中に埋めにいく…今の時期、登山や観光で山に入る人間が多い。犬を連れて狩りをしにくる者もいるから、うまく隠すのは難しい。硫酸で溶かす…そんな大量の薬品、どこで買うのだ。

乏しい知識を寄せ集めて、行き着いた結論。

父親は、仕事上建築関係の技術に秀でていたし、材料も簡単に手に入る…

バラバラにして、コンクリートで固めてしまおう。

その後は、ほとぼりがさめてから 埋めるなり棄てるなりすればいい。

父子の共謀。感情をはぶき、どこまでも冷淡に。

なぜ、少女は死んだのか。なぜ、家の浴室にいたのか。父は、いったい何をしたのか……

それらの疑問は、すべて頭の隅へと追いやった。

考えてはいけない、動揺してはいけない。

わずかな心の乱れが、すべてを破滅させるのだから。

翌日には、警察が少女の搜索を始めていた。

森林の中だけでなく、川にも搜索班の姿があった。

しかし昨晚の雨が残留物を洗い流してしまい、警察犬も少女の足取りを最後までたどることができなかった。

幸か不幸か、自然の力が和也たち親子を有利にしたのだ。

和也たちの元にも、少女の目撃情報を求めて警察がやってきたが、父親が冷静に対応して やり過ごした。

少女の遺体を、浴室に隠したままで。

父は、必要なものをそろえるために家を出た。
待っている間、和也は静まり返った空間で、少女の遺体とともに過

ごす…

その時間は、どれだけ長く感じられたことか。

わずかな物音がするたびに、死んだはずの少女のが起き上がってくるのではないかという恐怖心にとらわれた。

父の帰りを待ちわびている自分が、滑稽に思えた。

これまでは同じ空間にただで息苦しかったのに、頼れる唯一の存在へと変わったかのようにだった。

けれどなぜだろう、ひどく冷めている自分もいるのだ。

あるいは父親よりもずっと冷酷に…

淡々と、少女を遺棄する方法を計略する自分が。

もう、後戻りはできなかった。

その夜、二人は“作業”に取りかかった。

水から引き上げると、糸が切れた傀儡のようにタイル張りの床に転がる華奢な体。

カビと腐敗臭が混ざりあつた浴室で、膨張し始めた少女の体を切り分ける…

左手で長い髪をつかみ、わずかに躊躇して、もう一方の手にある肉切り包丁を握りなおす父親。

少女の青白い首筋に、刃先が食い込んだ。
その後は力任せに包丁を押し付ける。

メリメリと耳障りな音がして、父も和也も総毛立つ。

子供の首を落とすのに、これほど力があるなんて…

父は思い切つて体重をかけた。

すると頭部が離れて、とたんに腕にかかっていた負荷が消える。
勢いあまつて前のめりになり、首なしの胴体に覆い被さつてしまった父は、慌てて後方に飛び退いた。

肩で息をしながら立ち上がり、一度 浴室を出ていく彼。
戻ってきたとき、その手には工具があつた。

包丁一本では、とても解体しきれないと察したのだらう。

外は、再び雨が降り出していた。それは激しさを増し、電動ノコギリの音を、骨をたつ刃物の音を、うまくかき消した。

死後とはいえ、溢れ出した血液は浴室を汚した。
二人も少女の血でベトベトになりながら、それでも黙々と肉塊の山をつくっていく。

そして人間だった面影もなくなると、作業は次の段階へと移された。

和也は父に指示された通り、セメント、砂、水を混ぜ合わせる。

小型の段ボール箱をいくつも組み立てると、内側にビニールを敷き、ドロドロとしたコンクリートを流し入れる。

それから手分けして、ざらついた灰色の海へ次々と肉塊をうずめていく。

最後に、唯一“彼女”であることを判別できる頭部を、和也自身の手で葬った。

ズブズブとぬかるみに沈んでいく感覚……絡み付く黒髪……

けれど、すでに恐怖も嫌悪も消えていた。

まともな感情など、麻痺していたのかもしれない。

段ボールを廊下に出すと、ひどいありさまの浴室を洗い流した。
早急に、しかし念入りに。

それらがすべて終わる頃には、もう夜が明け始めていた。

やがてコンクリートが固まって、段ボール10箱分ほどの人体入りブロックができあがると、とりあえず押し入れの中にそれを封印した。

数日後。

新聞やテレビを介し、公にされる少女失踪事件。

別荘地にきていた9歳の少女の行方、未だわからず。

顔写真こそ出されなかったものの、キャスターが述べた少女の特徴は、すべて“彼女”と合致していた。
今はもう呼吸をとめ、見るかげもなく、コンクリ漬けの状態で箱におさまった彼女と。

和也は新学期が始まり、学校へ向かう。

とくべつ変化もない、ありふれた学校での生活。
少女失踪など、ここでは話題にもならなかった。

が、

家に帰れば嫌でも現実が形となってそこに“ある”。

押し入れに積まれた段ボール箱。

そして、目の下にクマをつくりながらも眠ることができず、酒を飲む父。

二人が次の決断をするのは、それからさらに数日が過ぎた夜のこと。父はワゴン車に段ボール箱を積み込み、湖へ向かっていた。

親子水入らずのドライブなど、いったい何年ぶりだろう。

そういえば、こんなふうに一緒に何かをやるのも久しぶりだ。

けれどそれは、とても異常な、このうえなく異様な闇をはらんでいる。

会話もなく、そして休むこともなく車を走らせ、目的地に到着する二人。

真夜中の湖は　ただ暗く、静寂に包まれていた。

係留してあったボートをつかい、薄い月明かりの中、段ボール箱を水の底へと落としていく。

このまま季節が秋になり、やがて冬をむかえれば、湖には氷がはるだろう。

しばらく彼女が見つかることはない。

うまくいけば、永遠に…。

二人は ひどい疲労感で心身共にボロボロになりながらも、車に乗り込み、きた道に戻っていった。

“彼女”が“いなくなった”ぶん、軽くなった車で。

それから

翌春になっても、少女失踪事件は解決の糸口を見いだせずにした。

それが和也たちにとって本当に良かったのか、本人たちでさえわからないところだろう。

すべては闇の中、水の中……。

真相を知るのは彼らだけだった。

そして そのうちの一人である父・晶は、2年後に あっけなく逝く。

酔ったまま風呂に入り、浴槽で溺死 そう、周囲には伝えられた。

ただ、自殺という噂も陰で囁かれていた。

【ミナソコ】9

あれから、彩が再び“おかしな言動”をすることはなかった。素直に授業を受け、普通に会話をし、少女らしい笑顔さえ見せていた。

変に意識しているのは自分だけなのか…

ビクビクしていても仕方がない。

水瀬という名は偶然の一致、外見は単なる他人の空似…

和也は自らに　そう言い聞かせることで冷静さを保ち、家庭教師の仕事続けた。

そうして、繰り返されていく日曜日。

「先生に見せたいものがあるの」

その日、いつものように母親が茶菓子を運んできて、勉強を一区切りさせたとき、唐突に彩が言った。

「こつち」

母親の姿が完全に見えなくなるのを待って、彩は和也を手招きする。

不審に思いながらも黙ってついていった先　そこは、彩の部屋とは反対側にある角部屋。

扉のつくりは同じだったが、和也は異質さを感じとり、わずかに怯む。

「勝手に入っているのか？」

小声で尋ねると、彩は顔の前に人差し指をたて、それから　ゆっくり扉を開けた。

ひんやりとした風が、頬をかすめていった。

閉めきられていることが多いのか、この家　独特の匂いが凝縮されている。

こもった空気は埃っぽく、重い。

「お母さんがね、昔のまま残してあるのよ」

「え……」

「未だに“あの子”のことが忘れられないの」

彩が照明のスイッチを入れると、室内のものがはっきりと形を現した。

勉強机、ベッド、本棚…けれど彩の部屋と違い、フリルやリボンの装飾、ぬいぐるみ、おしゃれな小物入れなど、可愛らしさが全体に散りばめられている。

「…子供部屋…？」

「そう。姉さんの部屋よ。あの日から何も変わってないわ」

ドキリとした。

「姉さん…？」

「ええ。ほら見て」

彩は写真立てを取り、和也に見せた。
その瞬間、和也は全身に鳥肌が立つ。

同じ顔の幼い少女が、二人並んで写っていた。

一人は笑顔、もう一人は かたく口をむすんで不機嫌そうに。

絶句した。震えを感じ、嫌な汗がふきだしてくる。

「よく似てるでしょ。私たちは年子だけど、まるで双子みたいに瓜二つだったの。でもそれは外見だけ。すべてにおいて、姉さんのほうが優秀だったわ」

抑揚のない、機械的な声が響く。

和也は強く唇をかんだ。血が滲むほどに強く。叫び出しそうになるのを、必死でこらえていた。

「どうしたの、先生？ 気分が悪いの？」

ニタリと笑う彩。

「姉さんはね、ある日 突然いなくなったのよ」

恐怖のあまり後退る和也。

その動作にあわせて彩は間を詰めてくるので、やがて和也の背中は壁にぶつかった。

「姉さんの名前、凜っていうの」

(リン……水瀬 凜……！？)

思わず「あっ」と声を漏らす。

彩の炯眼^{けいがん}は、和也を捕らえてはなさない。

「両親は認めたくないみたいだけど、私はわかっているわ。凜は、もう死んでるって。

先生も そう思うでしょう？」

「……」

この子は何かを知っている。

あるいは、すべてを見抜いている ！？

彩は、和也との間合いをいつきに詰めた。

間近で見る その顔が血だらけの“凜”と重なり、戦慄をおぼえ息が止まる。

「あのね和也さん。」

あの時“一緒に遊んでいた”のは凜じゃないの。私なのよ」

和也の懸念は確信に変わり、同時に、彼女の言葉に新たな疑問符が浮かぶ。

「私のこと、本当に覚えてないの？」

目を見瞠るばかりで何も言えずにいと、彩は肩をすくめ、短く息をはいた。

「私は、和也さんを忘れたことなんてなかったわ。

なのに ひどいのね。凜のことは覚えていて、私のことはすっかり忘れてるなんて」

「……忘れて…？」

ちがう…

「友達もいない私に声をかけてくれたから、本当は少し嬉しかったのに」

ちがう、知らない、こんなのは嘘だ！

記憶、心が めちゃくちゃに攪拌される。

彼女の言葉…その存在が、触れてはならない劇物のようなもの。
和也の中に投げ込まれたのは、間違いなく毒だった。

心臓は異常な速さで脈打ち、呼吸は乱れ、苦しさに喘ぐ。

動揺しながらも、和也は気づき始めていた。

自分の記憶は、何か重要な部分が抜け落ちていると。

あの時、自分は何を見、何を感じ、何を“した”のか

ふいに、夏の風が通り抜けた。

眼前に広がる鮮やかな緑。

揺れる黒髪、ワンピース姿の少女…

「ちがう…君じゃない…だって、あの子は凜と……自分で“凜”と
名乗ったんだ！」

自分の口から出た言葉に驚き、動揺は さらに激しくなる。

記憶…本当の記憶…

これは誰の記憶…？

「正解よ、和也さん」

彩は、彼女らしくもない大げさな物言いをした。

「ちゃんと思いつけたじゃない。

でもね、あの女の子は私だったの。だって私、嘘をついたんだもの」

「嘘……？」

「あなたに名前を聞かれたとき、私はわざと“凜になりすました”のよ」

少女の口元に浮かぶ、薄い笑み。

「5年前、私と凜は家族で避暑地の別荘に行った。
そこで凜は、私のかわりに“神隠し”にあったのよ」

瞳の奥に宿る、狡猾な光。

「いいえ、神隠しなんかじゃないわ。

ねえ、和也さん。あなたが一番よく知ってるんじゃないかしら」

「……俺は……」

（ あれ……？ ）

あの日、家に帰ると……帰ると……？
いや、違う。

帰ってきたのは和也ではない。

（ 帰ってきたのは 父さんだ…… ）

では、家で待っていたのは誰か。

（ 何か、変だ…… ）

闇が口をあけようとしていた。

記憶のゆがみは、やがてはつきりとした亀裂に変わる。

そうだ、待っていたのは自分。物言わぬ少女を浴室に隠し、家にいたのは

「俺……！？」

くずれていく…

やっとなつくりあげた幸せが、理想的な世界が。

それは脆く、薄氷のように脆く…

なぜなら、はじめから嘘で塗りかためられた世界なのだから。

妄想によって自分の罪を父親に肩代わりさせ、悲劇の主人公を演じてきただけなのだから。

（そんなはずない…違う違う違う…っ！！）

胸中で繰り返す。

けれど、一度ヒビが入った防壁は、容易く侵食されていく。

真実が今、不死身の蛇のように頭をもたげ、和也自身に食らいつく。

なぜ遺体は家にあつたのか？　なぜ彼女は死んだのか？　彼女を運んだのは誰？

彼女を殺したのは、誰　？

「…っ…ああ…っ！」

和也は小さな悲鳴を上げた。

背中に感じた不愉快な重み…生ぬるい人の体温…手に残る感触…

ガラスが砕け散るような衝撃は、頭を激しく揺さぶった。

自分を守るため緻密に再構成した二セモノの記憶が、音を立ててはがれ落ちていく。

そうして見えてきた、おぞましい本当の過去。

彩の言葉は、それを顕現する。

「あの時、なぜ凜を殺したの？」

「！？」

「それとも、私を殺すつもりだったのかしら」

「ちがう…違うつつ！！」

どんなにもがいても、現実の妄想を完全に消し去ろうとしていた。

幼い少女を遊びに誘ったのも、殺したのも、遺体処理を“手伝わせた”のも…

（みんな……自分……！？）

『頼りにしている』と、『助けてほしい』と言って父親を罪惡の汚泥に引きずり込んだのは

あの頃14歳だった、和也という少年に他ならなかった。

【ミナソコ】10

小鳥のさえずり、木の葉と風が交わす囁き、川のせせらぎ…

穏やかな木漏れ日と、水面に反射する まばゆい光。

土は太陽の熱をゆっくりと吸収し、乾いたアスファルトは容赦なく照り返す。

暑い夏、田舎の風景。
それは故郷の思い出。

けれど、今の彼には愛執も懐旧の情もない。

ただ、すべてがひどく厭わしい…

両手で顔を覆い、その場にひざをつく和也。

まだ混乱がおさまらない彼を見下ろして、彩は言う。

「やっと思い出してくれたわね、和也さん」

責めもなければ許しもない、心情の見えない彼女の声は、物語を読み聞かせるかのように続けられた。

「5年前、あなたと私は確かに出会っていた。

川辺に一人でいた私に、あなたのほうから声をかけてくれたのよ」

彩は独りが好きだった。一人でいることに慣れていた。家族といても、なぜか苛立ちばかりがつのる……
いつも自分は浮いていた。

「ほんとは居場所がほしかった。自然の中を歩き回って、そんな場所をさがしていたのかも……
人の中にいるよりは、ずっと心が楽だったから」

和也は顔を伏せたまま、何も返すことはない。

それでもかまわず、彩は紡ぐ。

「あなたが私に気づいてくれたとき、戸惑ったけど嬉しかった。
何か、近いものを感じたのかもしれない。それは和也さんも同じじゃないかしら？」

（ああ……そうかもしれない……）

和也は、ぼんやりと耳に入ってくる彩の声に、そんなことを思う。

人との関係も自分自身の存在も、全部 曖昧で、上っ面ばかりの空虚感に満ちていたあの頃。

確かに似ていた…彩と和也は。

「ぎこちない呟きは、だんだんと他愛ない会話になった。距離感はまだまだぬぐえなかったけど、友達になれそうな気がしてた」

けれど、彼らにはあまりに時間が足りなかった。

彩たち家族が別荘を離れる日が数日後にせまり、それは和也との別れも意味していた。

「もうじき帰るんだって伝えたら、あなたは私を誘ってくれた。うちに遊びにおいでって。

あなたの手は優しくかったけど、私は少しだけ怖かった」

関わりかたが不器用で、気持ちをうまく伝えることもできなかった二人。

「どうして……」

やっと聞き取とれる小さな声で、和也は尋ねる。

「どうして あの時、嘘をついた…？」

表情は隠されていたが、声にわずかな憤りがにじむ。

「名前のこと？」

「……」

「そうね…なぜかしら。わたしも、本当のところはよくわからない。ただ……」

ちよっとおどかしてやろうと思ったのかも、凜を「

君の名前は？ そう聞かれた彩は、とっさに嘘をついた。

『凜』だと。

明日なら、遊びに行ってもいいよ 凜になりすました彩は そう
答え、二人は約束を交わしたのだ。

『明日、また会おう』

山の中腹にある寺へとつづく道、その入口にある小さなやしろ
その前で待っているから。

「次の日の朝、私は凜に言ったの。親には内緒で、探検に行こうつて。とても素敵な場所があるからって」

純粹で好奇心旺盛な ひとつ年上の姉は、疑うことなく目を輝かせた。

彩は、和也との約束より早い時間に、何も知らない凜を やしろへとつれていった。

ちょっと待っていて そう告げて、姿をかくす。

しばらくして、やってきた和也は少女の後ろ姿に声をかけた。
『凜！』と。

外見は双子のような姉妹。

和也は、待っているのが自分の知る少女だと思い込んでいた。

けれど

“本物の凜”は、突然見知らぬ少年に自分の名を呼ばれ、驚きを隠せない。

『なんで、私の名前を知ってるの…！？』

少年といっても、当時の二人の体格差は大人と子供ほどの違いがある。

驚きは、すぐに恐怖心へと変わっていく。
一方で、動揺したのは和也も同じだった。

昨日は普通に話していた少女が、突然、化物でも見たように怯えた顔をしたのだから。

どうかしたのか？ 和也が手を伸ばすと、少女は慌てて後退る。

彼女の怯えは いっそう色濃くなった。

互いの不安と焦りが伝達し、不信感はつのるばかり。

妹をさがさなきゃ そんなことをつぶやいて駆け出そうとした少女の腕を、思わず、和也はつかんでしまう。

瞬間、少女が悲鳴を上げた。

和也のほうも動転し、少女の口をふさぐ。
静かにしてくれと言っても、もがき暴れる少女。

もみ合いになり、やみくもに振り回した少女の小さなこぶしが、和也の顔に当たる。

何かが、プツリと切れた。

たたかれた痛みと、騒がれたことで感じた恐怖、拒絶されたという絶望。

おとしめられた自尊心…それは怒りへと変貌する。

和也の手は、いつの間にか少女の細い首を絞めあげていた。

「ちがう……殺すつもりなんてなかったんだ……」

もうこの世にいない凜への言い訳を、すぐそばにたたずむ彩に向かって吐き出した。

「つもりがなくても、結果として、あなたは凜を殺してしまった。そして私は、凜を見殺しにした」

「え…!？」

和也は やつと顔を上げ、彩の姿を瞳にうつす。

彼女は穏やかだった。微笑んでいるようにさえ感じられた。

「私は、凜の呼吸が止まるのを隠れて見ていたの。彼女を背負ったあなたが、獣道をおりていく様子もね」

そうだ…

動かなくなった少女を見て、和也は取り返しのつかない事態に震えた。

絶対に誰にも知られてはならない、はやく“これ”を隠さなければ。不思議なくらい重い遺体を担ぎ、雑木林の中を通って やつこのことで家にたどりついた。

そして、陰惨な夜へとつながっていく。

巻き込まれたのは父親のほうだった、という点をのぞけば、彼ら親子の行動は和也の記憶していたものと差異はない。

「復讐でもするつもりで、俺に近づいたのか？」

「そんなこと。私、あなたを恨んでなんていないわ。だって…」

はじめて見る彩の表情に、その心の底から溢れ出した笑みに、和也は異常さを感じずにはいられなかった。

「だって私、凜が大嫌いだったんだもの」

彼女が秘めた闇色の……それもまた、真実。

【ミナソコ】 11

世界は、一夜にして変わってしまった。

いや、正確には もともにとっただけなのかもしれない。

自分だけ宙に浮いたような、フィルター越しの世界に。

夢から覚めたのだ。自分勝手な幻想の消滅。

あの後、和也は水瀬邸から逃げ出した。

母親には不審に思われただろうが、そんな些細なことはどうでもいい。

ただ、一刻もはやく離れたかった……彼女から。

家庭教師は辞めることにした。

それは後ろ向きな決意。

彩という現実と向き合うことも、過去と切り捨て悠然とかまえることもできないのだ。

大学　見慣れた風景と見知った顔ぶれ。
それなのに、とても居心地が悪い。

まわりつく不快な緊張にたえながら、白衣の男を視界にとらえ、
慌てて呼び止める。

「加賀美先生！」

相手はすぐに気づき、眠そうな目を和也に向けた。

「ちょっと、いいですか」

「ああ…どうした？　怖い顔して」

「え…」

切羽詰まった心情がそのまま顔にはりついてた事実を指摘され、
とっさに愛想笑いを浮かべる。

が、それさえ今は困難だった。

和也は端的に、家庭教師を辞めさせてもらいたいと加賀美に告げる。

「えらく急な話だな」

「…ちよつと、自分のことが忙しくなってきたっていうか…時間的にも余裕がなくて……」

見え透いた嘘。

本当は、何食わぬ顔をして あの家に通うなど、到底無理だからだ。彩と関わるのが恐ろしい いっそ、はっきり言ってしまいたいほどだった。

しかし、その事実を決して口にできない。

「そうか、残念だなあ。向こうも お前のこと気に入ってたみたいなのに」

「すみません…。次回うかがったときに俺からも話すつもりですが、その前に先生からも一言連絡してもらえると助かるっていうか…」

「ああ、わかった。話しとくわ」

「ほんとすみません」

「いって。こっちも、けっこう強引に任せちまったしな」

加賀美は、意外なほど あっさりと承諾してくれた。

何を怪しむでもなく、ちゃんとした理由を追求するでもない。
いつもと変わらない、覇気のない笑いをもらっただけだった。

これでひとつ、肩の荷はおりるだろうか…

ホッとしたのも束の間。

（そんな単純なものじゃない）

わかっている。背負ったものは、一生消えないのだと。
記憶をリセットできたらどんなにいいか。
勝手だけれど、そう願わずにいけない。

彩によって壊された鍵、こじ開けられた引き出し。
そこからあふれてきたものは、和也を打ちのめした。

同時に、彼の中に再び芽生えた狂気。

理想的な世界に必要なものはないものは、みんなみんな消えてしまえばいいのに。

あるいは

（もう一度、消してしまおうか…）

それでも、良心をなくしたわけではない。
祖父母の顔が、脳裏にちらついた。

彼らを裏切るとはしたくない。
守りたい。この繋がりは、穢すことなく。

そして、もうひとつ。

「一条、帰りにどうか寄ってこっぜ。今日は武居も付き合っつてさ」

「三樹のおごりだそうだ」

「ちょっ、待て。割り勘だろ！」

和也の世界に いろどりを与えてくれるものたち。

…この関係も、できることなら壊したくない。

「おごりなら付き合っつよ」

「一条までっ」

せつかくできた友達なのだ。

上っ面だけじゃない、心を許せる、かけがえのない人たち。

けれど。

今までが“演じて”きた人生ならば、彼らが見てきた“一条和也”は偽物だったのか。

友人たちが認めている和也は、本当の自分ではなかったのか？

わからなくなる。

“一条和也”とは、いったいどんな人間なのだろう。

過去の自分が、14歳のまま突然未来に飛ばされてきた気分だ。

空白の5年間、誰か別の人間が“一条和也”としての人生をおくり、いきなりその誰かの時間枠に放り込まれたような。

今、自分はちゃんと笑えているだろうか。

そしてこれから先、笑って生きていけるだろうか。

【ミナソコ】 12

家庭教師、最終日。

授業を始める前に、和也は客間に通された。

顔合わせのときのように、彩と向かい合うかたちで席につく。

正直、和也は彩にどんな態度をとられるかと懸念していたが、会ってみればごく普通。彼女は実に落ち着いていた。それは不気味なほどに。

一方的に離れようとすれば、過去の罪を両親に話す 最悪、それくらいの脅迫もあるかと思っていたのに。

「お話は、加賀美さんからうかがっています」

ティーカップを手際よくテーブルに並べながら、母親が言った。

そそがれた紅茶の香りが ふわりと宙に舞い、鼻腔をくすぐる。

「急なことで、本当に申し訳ないです。先週も、途中で帰ってしま

つて…」

「お気になさらないで。一条先生は まだ学生さんですもの。ご自分の勉強が第一ですわ」

「今回、家庭教師をやらせていただいて、僕としても良い経験になりました。

彩さんは、とても優秀な生徒でしたよ」

「そう言っただけだと、こちら嬉しいですわ。ねえ、彩？」

紅茶を口に含みながら、ちらりと彼女を見る。

「和也さんの教え方、わかりやすかったです。きつと素敵な先生になれるわ」

最初の頃には想像もできなかった、やわらかな笑顔。

「ありがとう」

「今度のテスト、私、頑張るから。せっかく和也さんに教わったんだもの」

清楚な美少女と、温厚な好青年。
傍目には、とても穏やかな会話。

しかし実際は、善人面を装ったペテン師同士の駆け引きみたいなものだ。

何も知らない母親だけが、安穩と日常の一場面を過ごしている。

「ねえ、和也さん。テストで私が学年上位に入ったら、ご褒美に遊びにつれて行って」

普段より ずっと子供らしく、はしゃいでみせる彩。

「ちょっと、彩！

すみません、先生。勝手なこと言って…」

「いえ」

彼女の“無邪気な”要求に、少し驚いたのは確かだ。
けれど和也は、冷静に返した。

「それじゃあ、学年10位以内に入れたらね」

「ハードル高い……でも、無理だと決まっではないわ。
絶対よ、和也さん。約束だから」

「いいよ」

約束　二人には重いはずのもの。暗い影をおとす、意味深な言葉。それを交わすことで生じる、義務と結末。

一緒に遊ぼう　今さら　あの時をやり直す気など、互いに毛頭ない。

それでも、やはり断ち切ることはできないのだろっ。彼らのゆがんだ関係は。

「最後の授業、よろしくお願いします。先生」

立ち上がり、深々と頭をさげる彩。

長い髪で隠れた表情　そこにあるのは、笑みか苛立ちか。

もう、あれこれ考えるのも面倒だ。

和也は　そっと、カップの中の琥珀色の揺らめきに視線を落とした。

それから彼女の部屋で授業をし、何事もなく、終わりの時間は刻々と迫る。

教科書を閉じ、ペンをおく彩。

「ねえ、先生。ひとつ答えて」

彼女は ふいに、明日の天気でも聞くような口振りで言った。

「凜は、今どこにいるの？」

まったく動じていないと言えは嘘になる。が、これも想定内。覚悟はしていた。

和也は もう、いちいち過剰な反応はしなかった。

「…それを聞いてどうする。俺の弱味でも握ろうってわけか？」

彩は小さく溜め息をつく。

「まだ疑ってるのね。私、目的があってあなたに近づいたんじゃないわ。本当よ。

こうして再会したのは偶然だったの」

「…偶然…か」

「必然であってほしかった？」

「……」

「そう怖い顔をしないで。私は嬉しかったのよ、和也さんに会えて運命って言葉は嫌いな。誰かがあらかじめ決めたものに縛られて、抗えなかった結果みたいだから」

わずかな間をおき、彩は確信をえたように告げる。

「そうね…」

何か絆みたいなものがあるのよ、私たち。そう、感じない？」

和也は しばらく黙り、それからつぶやく。

「湖……」

「え？」

「湖の底に」

彩の口元に、かすかな笑みが浮かぶ。

「そう……」

「連れて行ってやろうか」

なぜそんなことを口にしたのか、自分でもわからない。
考えもなく、無意識に発せられた音。

「自分の目で、確かめたらどうだ」

彩は一瞬 息をのみ、それから鈍色にびいろの瞳を輝かせる。

「……素敵！」

今、ここにある現実。

「次のテストで、上位の成績とれたらね」

一条和也という平凡な大学生の、短い家庭教師体験は終わった。

【ミナソコ】13

和也は“演じる”ことに没頭した。

今まで以上に勉学に励み、常に明るく振る舞って、交友関係を広げるために三樹の誘いにも快く応じる日々。

何事も積極的にこなし、わずかな時間も惜しんで活動した。

情性的に生活をおくっていると、目的も、生きている実感さえも失ってしまいそうだったからだ。

自分が自分であること　　当たり前なのに、ひどく曖昧で不安定に思えた。

個性、人格、環境と出会ってきた人たち…
それらのものを再度確認し、自分を形成し直している途中なのだ。

演じる自分など、嘘の上塗りにすぎないのかもしれない。
けれど、つき続けることで真実と同等になる嘘もあるだろう。

良くも悪くも、和也はそれを知っていた。

そしておそらくは、あの少女も。

彩と距離をおきながらも、その存在が和也の日常から消えることは、もはやない。

どんなに　がむしゃらに日々をおくろうと、彼女の姿が、言葉が、どこまでも和也に付きまとう。

再会できたことが嬉しい　彩の言葉に偽りはないだろう。
けれど、裏に別の思いが隠れているのも　また確か。

絆みたいなものがあるのだと、彼女は言った。

二人を結ぶ赤い糸…
それには、恋人たちを導くきらめきなど一切ない。生け贄の血で赤黒く染まった、首をくくるためのロープだ。

孤独を埋め合わせようとした代償は、本人たちが思っている以上に大きい。

けれど二人の選択肢に、償いの道はない。
彼らを選んだのはただひとつ、真実を闇に葬り、完全犯罪を果たすこと。

本質的な部分では、和也と彩は同類なのだ。

黒い水に浸かっている、彼らの魂。
浮かぶのも沈むのも、これからは二人一緒だろうか。

一蓮托生…まるで共犯者。

（俺は絶対に沈まない。なにがあっても這い上がってやる…！）

その電話は、ある晩 唐突にかかってきた。

ケータイの着信音、画面には水瀬家の番号。

彩はまだ、携帯電話を持つことを親に許されていないのだ。

一応こちらの番号はずいぶん前に教えてあったのだが、実際かかってきたのは初めてだった。

わずかにためらいを覚え、慎重な動作と心構えで電話に出る和也。

『お久しぶりです、先生』

やけに他人行儀な物言いに、一瞬、母親かと勘違いしそうになる。

「…やあ、久しぶり」

しかし、それは確かに彩本人だった。

「その先生っていうの、もうやめてくれないか…」

『わかったわ、和也さん』

電話口で、彼女の小さな笑い声が響く。

『約束、忘れてないわよね？』

「あ……ああ……」

うやむやにしたいのは山々だが、そんなことは彩が許すはずがない。

テスト結果が良ければ、あの湖につれていく。

彩は見事に約束を果たした。
試験結果、学年9位。

『ギリギリだったけど、和也さんの言った10位以内には入ったわ』

傲慢する態度は一切感じられない、落ち着いた口調だったが、それが逆に和也に対してのプレッシャーとなった。

「……さすがだね」

言葉を返しながらも、和也は気が遠くなる思いだ。

今さらながら、後悔に似た苦い感情があふれてくる。

『次は、和也さんが約束を守る番よ』

顔は見えないのに、彩の鋭い眼差しに射抜かれたような気がして、背筋が急に寒くなった。

『週末、一度会って話したいの』

逃げるだけ、無駄だと悟る。

「いいよ」

和也は答え、電話を切った。

そして、自分に言い聞かせる。

翻弄されてはならない、と。

週末、大学の近くにある公園で会うことになった二人。

几帳面な彩と、マイペースながらも約束は律儀に守る和也。

待ち合わせ時刻五分前、到着したのはほぼ同時。

普段通りのラフな服装にジャケットをひっかけてきただけの和也に
くらべ、彩は少しだけオシャレをしていた。

チェック柄のスカートにショートブーツ、色目を合わせた薄手のコ
ート。

少しレトロな雰囲気が、彼女にはよく似合っている。

「お父さんとお母さん、出かけるの許してくれたわ」

にこやかに、彩は告げた。

「俺は、君の両親にずいぶんと信頼されてるんだな」

「良かったじゃない」

「……」

「そんな怖い顔しないで。皮肉のつもりで言ったんじゃないわ」

かつて娘を奪われた両親。やっと他人を信用する心を取り戻したの
だろうが、残されたもう一人の娘を任せた相手が殺人犯などとは知
るよしもなく……。

もちろん知られてはならない事実であって、些末な疑念すら抱かれ
ていないのは、和也にとっては好都合といえる。

が、それでも ほくそ笑む気にはならない。
心境は複雑だ。

「和也さん」

名前を呼ばれ、我に返る。

「つれていつてくれるのよね？」

「…あ、ああ……。約束は約束だ」

「良かった」

日取りは和也に任されて、彼もそれを承諾した。
せざるを得なかった。

自分の姉の“死”を確認に行く。

それなのに、彩の晴れ晴れした表情はどうだろう。

まるで、遊園地に行けることが決まって待ちきれない子供のようだ。

「和也さん、この後なにか用事ある？」

「べつに…」

「じゃあ、デートしましょ」

「…は？」

調子がくるい間の抜けた声を発した和也の腕を、彩は なかば強引に引っ張っていく。

買い物にでも付き合わされるのかと思ったが、ただ公園内を散歩して、図書館に立ち寄っただけだった。

図書館の外にあるベンチに腰かけ、彩は借りたばかりの本をパラパラとめくりながら言う。

「私、こうして外で男の人と会うなんて初めてなのよ。」

ちよつと前まではね、一人で出歩くことも許されなかったんだもの。

お母さん、一時期ノイローゼ気味だったから」

「……」

「あの子がいなくなれば、私はもっと自由になれると思ってたのに、これは誤算だったわ」

（誤算……？）

目だけ動かして彩を見ると、彼女もこちらを見つめていた。

気まずさに、視線は泳ぐ。

「そういえば、和也さんは、おじい様とおばあ様と暮らしてるのよね。」

「ご両親は、まだ田舎に？」

「母さんは、俺がまだ幼い頃に死んだ。父さんは……」

言いよどみ、表情は翳る。

さすがに彩も悪いことを聞いたと思ったのか、

「ごめんなさい」とつぶやいて、それきり口をつぐんだ。

会話は途切れ、二人の世界は沈黙に支配される。

周囲のざわめきは、その世界に侵入することを許されない。

ふいに、鳥の群れが飛び立った。

はっとしたように、それを見上げる彩。

和也は羽音だけを聞きながら、じっと自分の手を見つめていた。

「…………後悔……」

「え？」

少しかすれた和也の声に、彩は首を傾げて聞き返す。

「後悔、したことはないのか？」

横目で見ると、少女は きょんとした様子。

「何を？」

わかっていてとぼけているのか、本当に意識していないのか。

淡泊すぎる彩の態度に、和也は返す言葉も、気力さえもそがれてしまふ。

「……いや、いいんだ」

冷たい風が、木の葉をさらっていく。

そっと、彩の白い手が和也の指先に触れる。

「冷たいね、和也さんの手」

彩の手は温かいのに、和也はさらに体が冷えきっていくような気がしていた。

夜が裾をひきずって、寂漠とした静けさに満たされた早朝の街。

和也と彩は、肌寒い駅のホームにいた。

手にした往復切符が、やけに皮肉に感じられる。

新幹線に乗ると、彩は窓際に座り、少しだけ浮わついた様子でや
っと明るくなった外の風景を眺めていた。

和也は喉に何かがかえたような不快感が消えず、それをごまかす
ために用もないケータイをいじる。

長い乗車時間、交わされた会話はごくわずかで、ほとんどが彩から
の一方通行。それでも彼女は、楽しげに微笑んでいた。

その後、電車を乗り継いで目的の駅に着く。
そこからは、レンタカーで湖へ向かう。

再び、あの場所へ向けてドライブすることになるとは思わなかった。
違うのは、助手席に座っているのが彩で、以前は父がいた運転席で
ハンドルを握るのが和也自身だということ。

それから、物言わぬ“三人目”が乗っていないこと。

「ちょっと待って」

彩の声に、和也は車のスピードをゆるめた。

「先に、ここに寄ってほしいの」

ちらりと見ると、彼女は観光ガイドブックを広げ、美術館の写真を指差していた。

物見遊山に興じる気になどなれない和也は、あからさまに顔をしかめる。

すると彩は、弁明するように言った。

「アリバイ工作ってやつよ。一応、両親には美術館を見るのが目的だって話してあるから」

「……まだ開いてないんじゃないか？」

「10時には開館するわ。少しくらい待ってもいい」

和也は ひとつ息をはき、

「わかったよ」

当初の進路をそれ、ハンドルをきった。

アリバイ工作のため、と言ったわりに、彩は美術館見学を楽しんでいるように見えた。

何か食べたいと言うので、喫茶店に入る。

食欲のない和也は とりあえずコーヒーだけ注文したが、なんとも味気なかった。

本当は姉の死など どうでもよく、単に遊びにきただけなのではないか？

和也の心中は曇るばかりだ。

「ごちそうさま。」

それじゃあ、そろそろ行きましょうか」

「ん……？」

「なにボートしてるの、和也さん。
メインイベントはこれからでしょう？」

「……」

無邪気な笑顔が恐ろしい。

彼女は、確かに楽しんでいるのだ。

常に備えている合理性も今は捨てて、罪深いほど単純に。

「つれて行って、あの子のところへ」

観光シーズンが過ぎたその場所は、人気もまばらで閑散としていた。
確実に冬の近づいた水辺の空気は、ひどく冷たい。

車を止め、二人は湖畔を歩く。

「なんだか、普通ね。平穏すぎる風景だわ」

どこか拍子抜けした様子で、彩はつぶやいた。

「でも……この底にいるのよね、あの子が」

「……」

和也は立ち尽くしたまま、暗然として言葉もない。
彼にとっては、忌まわしい思い出しかない場所だ。

わざわざここに戻ってくるなんて、愚行としか言いようがない。

どうして、彩をつれてこようと思ったのだろう。

凜はどこにいる？ その質問に、手っ取り早く答えるためか。
姉の死を、現実を彩に見せつけることで、少しでも優位に立ち
したのか…？

いや、違う。

その程度で恐れを抱く娘でないことは、すでに承知している。

罪を告白したうえ殺人の証拠を彼女に与えてしまえば、ますます苦
境に追い詰められるだけなのに。

自分の行動に理由をつけようとすると、焦燥感にとらわれた。

ふいに、彩をこのまま湖に突き落としてしまいたい衝動にかられる。

過去の亡霊とともに消えてくれたら、どんなにいいだろうかと。

そうすることで自分が解放されるなら……と。

都合の悪いものは、みんな排除してきた。記憶の外へ追いやった。

そうだ、これからも同じように……

和也の腕は、ゆっくりと彩の背中に伸びていた。

【ミナソコ】15・最終話

「いいきみだわ」

長いこと放置していた傷口が腐臭を放つような、ゾツとさせられる言葉。

和也の手は彩に届くことなく、虚空をつかんでだらりと垂れ下がった。

彼女の闇は、自分のそれよりはるかに底知れないのではないか。そう思うと、圧倒された。

深淵に飲み込まれそうで悚然とする。^{ショウゼン}

同時に、いつそ墮落しきってしまいたいという歪んだ甘えも芽吹き始めていた。

彩が和也にこだわっているように、和也もまた、少女との関係に依存し始めているのか。

それは、自分でも気づかぬうちに…

「後悔したことはないかって、和也さん言ってたわね」

湖を見つめたまま、彩は静かに告げた。

「ひとつだけ、あるわ。

凜になりすましたことで、和也さんの記憶に私自身が残らなかったことよ。

でも……

これからは、いつだって私のことを思い出してくれるわよね？ 凜はもう、永遠に水の底だもの」

そして、彼女は語り出す。

「ねえ、和也さん。私たちの間に、秘密は無しにしましょう」

自らが抱えてきた、醜い感情を。

自分が努力してやっと手に入れられるものを、凜は あっさりと手にしてしまう。

いつでもそんな姉と比べられ、どれほど悔しかったか。

凜さえいなければ…

ずっと、そう思っていた。

「あの子の驚く顔が見たかった。怖がらせてやりたかった。あなたを利用したのよ、私。

あの時、あなたは少なからず、私に対して欲情していたでしょ？」

可憐な容姿からは連想できない、口にすべきではない単語。
また、そのギャップから生まれる生々しさに、和也は一瞬 身を震わせる。

違うと、否定しきれない。

幼いながら、当時から彼女は美しかった。

友達になりたい…それとは違った感情が、思春期だからという言葉い訳になるかもしれないが、異性への興味 その対象としてとらえていたのは事実だった。

「凜なんて、ひどいめにあえばいいと思った。

いい子ぶったあの腹立たしい笑顔を、消してやりたかった！」

めずらしく感情的になる彩。

「あそこで死ぬとは思わなかったけど……私、笑ったわ。予想を超えた結末だったんだもの！」

あの時、彼女には悲しみも恐れもなかった。
ただ、世界一嫌悪していた存在の消失に興奮した。
歓喜さえ覚えたのだ。

今は とても冷静だ。

けれども、凜に対する後悔は微塵もない。

「いちばんひどいのは私なのよ。和也さんは悪くないもの。
あなたの罪も、ぜんぶ私が背負ってあげる」

「……背負う？」

そんな……背負いきれるのか、君に……！」

二人の間に、秘密はない

ああ、もういつそすべてさらけ出してしまおう。

もう、一人で抱え込むのは重すぎる。

「俺も、まだ話していない秘密を教えるよ。父さんのことだ」

「和也さんのお父様……亡くなったたっていう？」

「公には事故死、親戚は自殺だと思ってる。
泥酔状態で風呂に入って溺死？」

確かに、父さんは酒と睡眠薬を無茶な飲み方してたけど、
あの事件のことであれだけ精神を病んでいた人が、その現場だった
浴室に……死体の沈んでた浴槽に自ら入るわけないだろう」

それは、懺悔ではない。

「人間は本当に脆い。

浴槽いっぱいの水なんて必要ないんだ。

ほんのわずかな水でも、呼吸を阻害されれば人は死ぬんだから……！」

罪を吐露するというよりは、ただ激情にまかせて怒りを吐き捨てる。

「父親らしいことなんて大してしてくれなかったのに、最後の最後で善人ぶって……」

和也の記憶にある、父親の姿。事件の後、それは軽蔑を通り越し、
憐れですらあった。

不眠に悩んでいた父は、睡眠薬を常用していた。それも尋常でない
量を酒と一緒にあり、朦朧としながら布団に倒れ込む毎日。

けれど、悪夢が消えることはない。

寝ても覚めても、死んだ少女の姿が頭から離れない。

そしてある日、もうたえられないと弱音をはいた。

精神的に限界だ。これを終わらせるためには、すべてを告白しなければ　つまり、自首しようと言い出したのである。

そうすれば、いくらかは人としてマシになれる…

二人で罪を償おうと。

和也は、それによって今の世界が崩壊することにたえられなかった。

黙っていたれば、普通の暮らしは十分できるはずなのに。

全部忘れてやり直すんだ。

あの事が世間に知れたら、今までの苦勞が水の泡じゃないか…！

だから、消えてもらわなければ。

都合の悪いものは、過去と一緒にみんな消してしまえばいい。

和也が選んだのは、過去を完全に断つことだった。

「わかった」と答え、父親を落ち着かせて薬をすすめた。いつものように、多量の睡眠薬をアルコールで流し込む。

しばらくして…

朦朧とした父親に肩をかし、寝床につれていくふりをして浴室に引きずっていった。

そして浅い寝息を立て始めた彼の顔を、水をはった洗面器に押し付けたのだ。

その後、あれからずっと使っていなかった浴槽に水をため、もう何の反応も示さなくなった父を裸にし、突き落とした。

これが“事故死”の真相である。

凜に対しての行為が、とっさの衝動から偶発的に起こしたものだとして、

父親のほうは、確かな憎悪と計画性があったといえる。

釈明の余地もない。それはわかっている。

けれど和也は、父親の“裏切り”が許せなかった。

世間の常識だとか、道德観は関係ない。

最後まで守ってくれろと、そう信じたのに。

強く握った拳を、彩の手が包み込む。

そして次の瞬間、勢いよく和也に抱きついた。

驚き、鼓動が速まる和也の胸に顔をうずめたまま、彼女は誓いを口にする。

「私はあなたを裏切らない。私はあなたを守ってあげる。ずっと...
ずっとよ」

「.....」

慈愛と束縛は紙一重か。

愛しさと殺意は、表裏一体か...

ゆっくりと体を離れた彩は、静かに和也を見上げた。

「このまま、二人でどこかへ行ってしまうたらいいのにね」

悲しげにゆがむ唇。

その儚げな姿に、つい見入ってしまふ和也。

そのまま、しばし見つめ合う二人。

クスリと、彩が笑いをこぼす。

彼女の瞳は、何かを吹っ切ったように凧いでいた。

「帰りましょ、和也さん。今日は ありがとう」

ありがとう その一言は、和也に少なからず衝撃を与えた。
染み入るような優しさはなく、突き刺さるほどの激しさもない。
けれど、一生涯忘れることのできないものとして刻まれる。

過去について、もしもあの時などと どんなに悔やんだところで、
何ひとつ変えることはできない。

二人の首には、死ぬまで赤黒いロープが巻き付いているだろう。
いつ締まるともわからない、不吉な縄が。

彼らの戻る現実には、明日は、何色に染まっていくのだろうか？

湖を振り返る和也。

水底に沈んだ罪は沈黙を守り、湖面はただ穏やかに、光を反射するばかり。

そして、不愉快なほど平和な日常は つづいていくのだ。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9859w/>

ミナソコ

2011年11月17日19時26分発行